東家雜記

五

チ4
1077
5

1.077
5

繪本寶蘊生第五目錄

九十九 祖師 釈迦牟尼

一百 桃花怪道

百一 將行怪石

百二 丹霞木佛

百三 月下大癸

百四 花枝

百五 舟子

百六 知つ蓮華

百七 陳湖栽松

百八 鷲山猴子

百九 鏡列物子

百十 古祖

百十一 鮫子変山

百十二 蛙鳴子

百十二 馬祖
百十六 二祖立雪
百十七 拍樹子
百十九 著化
百十一 睦別
百十二 四睦
百十六 大徒無垢
百十七 丹霞燒佛
百十八 托鉢
百十六 二僧禪師
百十八 き懷國橋
百二十 牛山
百十二 俱胝豎指
百十六 德山棒
百十六 石鞏弦弓
百十八 仰山紅榜話

百十九 金牛飯桶
百十一 雪峯模龜
百十三 南泉斬猫
百十八 趙州樹上
百十七 天桂湯瓶
百十九 南泉牡丹
百十一 乳峯一滴
百十二 南泉茅鎌子
百二十 白靴老母
百十二 烏巢
百十六 德山燒經
百十八 女子出定
百十八 馬祖風幡
百十 牛頭見鳥
百十二 大中天子
百十六 長慶一枝草

百字十六　維摩不二法門

百字十七　除欲法壇

百字十九　黄山獨孤刀

百字十八　文殊無著問答

百字十八　夢築毒杵

百字十九　茅屋寒都

百字二十　京師三木桃

百字二十一　東部愛敬多羅毒

百字二十二　牛頭栴檀

百字二十三　摩訶一金水

百字二十四　摩訶一斤石

九十九　祖師　時代不同

伏羲周大聖釋迦如來と申奉れハ。周地陶唐ゟ忘ゟ上求菩提下化衆生乃勤力たりまたのめる三祇百劫ハ同ぜんの法仏と供せり。六度の行を修し。善薩の道を行ふ。第三祇滿の時菩提樹ハ葉仏よりあひ法ひ。ぞづゝ仏となりて我ゝ又人のしめを法ゝ。てよなのめるく如ゝ葉仏ハ獨処の第ゝと。なり。法ゝ人ゝ生を離て即涅槃天ゝ生ゝ百劫乃ゝ法のおゝを極。衆生の根機熟ゝるゝと見て降生ゝ。ら付ゝり機熟ゝるゝと見てく。娑婆ゝ中天竺摩訶陀国。浄飯王ゝ小下ゝ法ゝ。これ第一の相なり。

次に国乃野王二十四年甲辰にあたりてこれをの中国摩
竭陀国浄飯王宮摩訶菩提樹下にして二月八日に中夜に
摩耶夫人乃右脇より出生なり給ふ。次に七歩の
所にて。おのおのの方をまもり給ひて。父母ともに給ひて。
同廿七年十九壬申八月十五日に城を出給ふ。神駒にめされ
給ふ。この車匿童子に駒にとりて御供。伽耶城を
過給ひ檀特山にまかり。阿羅摩仙人の所におのおの
始て出家し給ふ。次に太子仙人の所有所定を習ひた
まふ。須臾にして始ひきたりめしたまへ。是あ誠
世界の法なれば。ゆへに仙人の如くなり。又尋ね給ふ
摩竭陀仙人の如くなり形と為定を習ふ。須臾にして。

又仙法ふ。これをもお離の法ふ。と。是より移て二仙を
もてて尼連禅河の辺に行給ふ。六年苦行を行給ふ。
扨廿七年三年の春十二月八夜明星あらはれ。法行を
成。すなわち雪山をあ出せんとし時に法の魔兵魔
軍ホ陣をとりたたかふ大強盛なる人威神力を以て。八千
乃魔衆等を降伏の給ふ。次に摩訶陀国の西
山菩提樹下にて。心を持て。端座。弟に強盛なる行。
金剛座と成て。如来と唱給ふ。次に此座を部ぶして
華厳経を説。三七日に説法なり。四三大乗を
説給ふ。次に乃通別円三大乗を
説給ふ。その時。世尊自調寧法法を
涅槃に入給ふ。又思惟すらく。三法仏の

化等いうと雖。三乗方便とうんとん。亦対十方法佛現
前して。善哉釈迦如来世尊一乗道作ありと。讃嘆したまふ。
釈尊自理彼二仏人ハ善哉釈迦の出れ作しうしたこれと
殺せんとおのひ給ふよ。彼二人の仏をてよ死せりきれだ
陳如十力ハ如乃一門迦葉の家鞞提梨太子ハ父
乃種族ありしたたを禅河あり。ふ年苦行ありと記。
父の命そ。ぶ人絵仕せ。めれだ。今波羅奈国鹿苑
苑よありとき。いざやゆきて度とんとく。華厳
坊と記。鹿野苑よ到ときひ。時中法ひて。提
理彼利の二長者よ値。仏を供養しまつる。即ち五
戒十善法つを授これを提謂経といふ。これより鹿

野苑よ到ときて。彼法ハ等ハ人これとまてていく。
太子或ハ苦よ長ふ。樂よ長ふ。仏の家ハ中うあんた
ふひこてよ長ふ。中道ふ。汎きてふれはよ太子相
好ふ滅みて長ふ。初よ陳如おのおのを座をもて。
たまを清ぐ水を汲ふ。ふ長を洗ふ。そのち佛に
帰せ滅の法を説。初の説法論よ。陳如一人初果
を得ふ。次二人三人の説法論よ。次五丘等。ことごく
そ。ふ阿含ふ初の説法ありまふ。
第二章縁のふふく記ところ。蓋第十二章よ縁八
ふくやはん次二乃説法ありふ。
よれ涅槃入滅の前。拘尸羅城沙羅双樹間よおのく

これと法華経乃ち涅槃阿含方等般若法華
遺教なりこゝに五時乃ち法華ともいう法華涅槃の極
大乗よりくるなり前に三教八教方便なりと法華
仏滅ち後ち偏に大乗を勧め小乗の経律等を廃
て多心教を説くなり法華を説きたまわく遺教とを説く
生滅と法華とは乃ち成仏七のたまう年九年三百
余會の法華経ここに竟ぬそのち二月十五日の夜
ひそかに滅度したまふ成仏八年八月十五日
乃涅槃なり仏法漢土に渡りし八仏漢明帝永平十年
摩騰法蘭の二梵僧四十二章経を翻訳し
我邦に渡りし欽明天皇十三年なり百済の王貢進す

附く釈迦仏像金銅像一軀幡蓋経論等と鈴と鐘
と経と鈴と鐘と
目を見て白象
と建て塔天
子に生まれ
ぬ月日
仏法乃ち
とあり深燈
道なり

出生
天上
天下唯我独尊

見星悟道

支那宗乃源八始鹿野苑ゟ起拔恒河ゟ渉りこゝ
ゟ行く二中間いまゝ如つく一字と成ゝ。成已三百六十
會一大時教ゟ如つく。兵こゝ一箇の方便ゟ九又
千軍八生く道理と成けく。終法八言語のゝ
あゝ。自成自悟自悟て成佛とゝ。故ゝ。世尊一枝
乃花とゝく。善哉ゟ。摩訶迦葉ゟ大如一葉の
破顔微笑ゟ。以乃ゝ。正法眼藏涅槃
妙心とゝく。摩訶迦葉ゟ付屬しゝく。笑沈と。
十八代て達磨ゟ。六代て曹溪ゟ。六代て
ゝく。陰陽ゟ。八代て。黄龍ゟ。
なり。泊りゝ。

百
桃花悟道
桃花ゟ。雪志勤禪
師。初洞山ゟゝく。因
に。桃花とゝく。懷
せり。廼曰三十年來
劍客と。尋ゝ。葉
と。又枝を拂ゝ逢
自一ゝ。桃花とゝく
ゝ。直ゝ如今ゝ
到ゝく。
疑ゝ

百一

鞍馬山僧侶の
割列の香炭翫用樣
仰初めよりよ長じて
樂りび。辨ちく直陽
の志あ仰の巻ぬり
拙く雄一り因よ命
ふ弟の未と艾除く鶴
孫と山く弁と軽ち
初と寸び侍り失笑
ちる乃廊紙して自
省ち乃偈と述く曰

一粒ふ而ち と云ふ。
色色の形威儀法方を乃
の有ちて ふく様と

百二

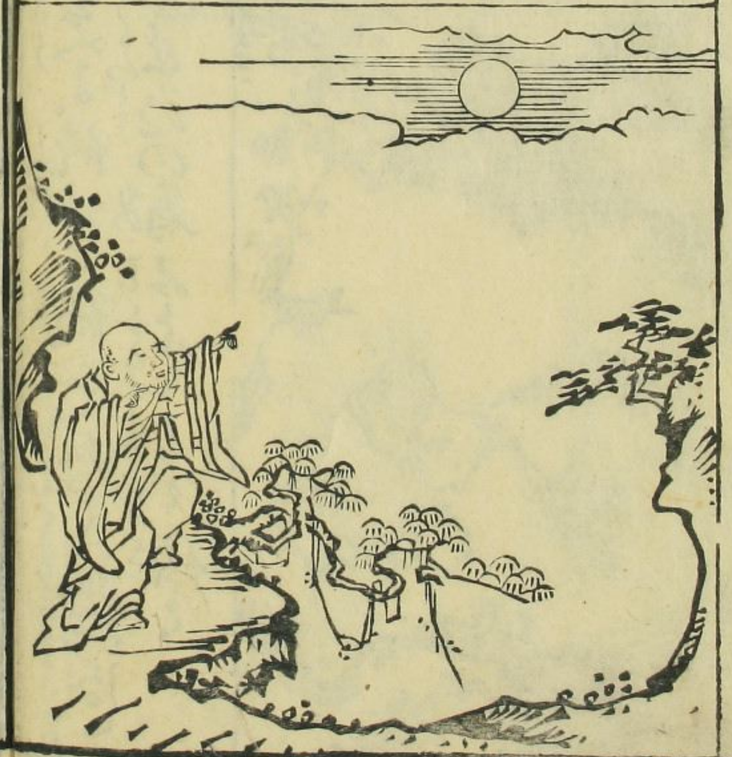
丹霞木佛

丹霞嘗洛京惠林
ちふ到天の寺ち
値く木仏とれこれ
と燒院ちこれと呼
霞ゴいく。吾燒く
舎利とちん。ちの曰
木仏豈舎利あん

や。寵が云ふ所。何ぞ釈と責んや。院を去り
眉髪蕭然

百三　月下大笑

茅山一夜山より窓を經
行くと思ふ窓開けて
月と見るく大笑ふ一
壺澧湯の乎の千星
ふ夜さう。居民ともぐ
く徳。東明夜送は
お推問して直ち茅山



ふ。法元の云。昨夜和尚山に入る大笑と。李和尚
給く問遠居と撰び給く。時ふ法年を訪
ふ。赤松子。有時直ち孤峯頂より
問下ると推く知ふと一切

百四　猪頭

散聖行く者ふ猪頭
と食を。法居賛問
瘡繩鬱國中孝子
恩見猪頭叫
吸吉凶問対

入湖烟系白鷺前とろく

百人

蜆子

元是散亜けく事
跡頗奚あり。行基許
乃人といふことをきゝ
京兆府に坂子和尚と云
仏居処けぶまゝに心を
河山に即きくう。俗
り国川に漁る。休憩に
循ひ。今夜唯一網城

投逐月に江岸に孤棹をうびろのくゝを脱り
元嘗に八郎東山の白る廣乃波瑳の中に富を岳民
用て坂子和尚とん

百人

船門蓮華

船門祇師小侍同道
花来水をあざる時いん。
師の云道花。云あを
あくないん。師のいく
荷葉

臨済栽松

臨済の玄孫師黄檗よりてく。松杉を栽るべし次ぐ。黄檗乃云深山裏小許毎の樹を栽く麼と云ふ。師云一ぱい山門のあふ境なしと。二ぱい人のあふ。標榜とあんと。道うて。鋤ぬを將て地を一下ちていく。

檗の云まうをかくしてもすでよ吾ニナ杉と嘶く。師まて地とうつと一下ちていく。黄檗の云吾家ぬよりも高く大ぬ毋うん百八

茅山婆子

茅山婆子師に接師問云茅山下に一婆子有標榜と。元侍者問茅山の路甚麼に向くう去。婆ぬいく茅山直去。侍者行三ぬ步。婆ぬ云好道。

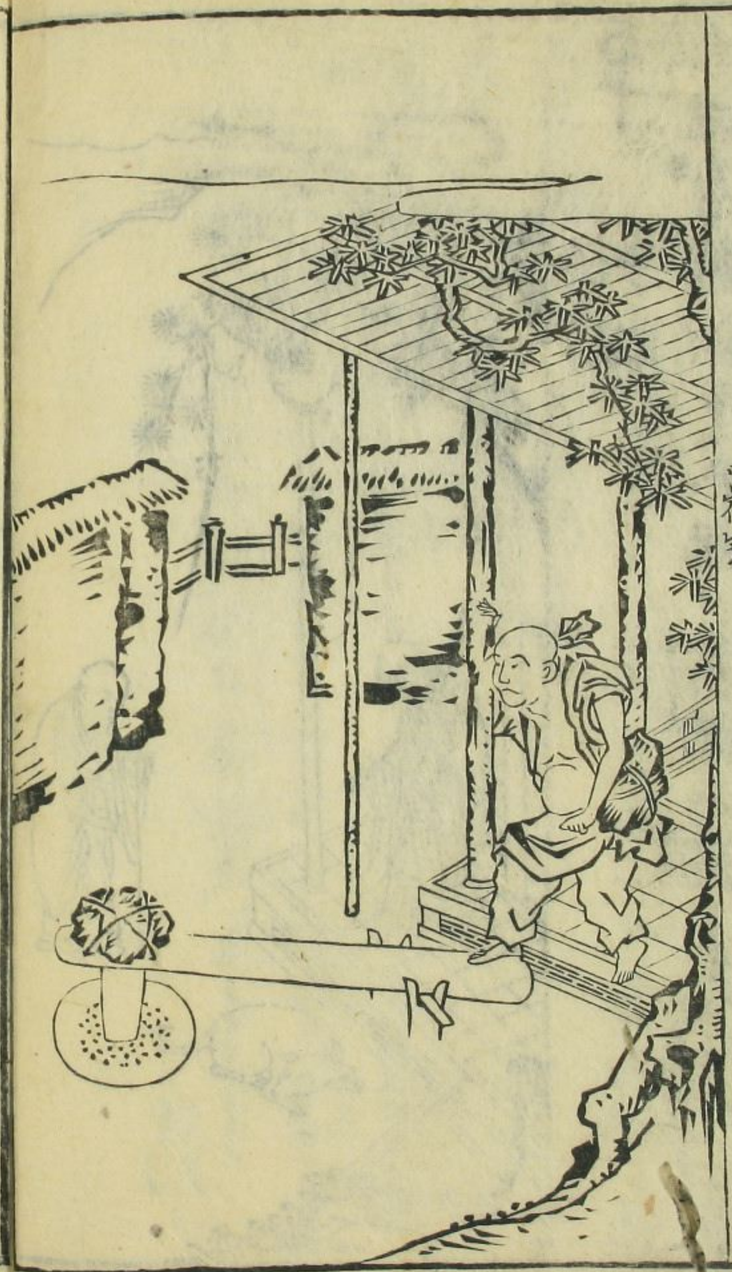
仏師佛を又怨魔ともふ云。ほふ僧あり。師ふ拳仏を
師の云狗子去くるとり遠僧をと勘ことん。明月師
徐去く赤如のごとく同僧をまくもくのごとくこと。
師坊くるち陸言して云のくあふ云臺山僧を我
ろふ如狗ろれうや

百九　請別狗子

請ふ仏性ありやまさるやや。
別のいく無。又同一切衆生ふ仏性あり。言ようろ
て狗子ふ如くうき。列の云業識乃ちうこと

百十　六祖

六祖恵能初先又祖ふ黄梅ふ得ふく法乳を教
ど。恵能ろと獨ふ員ふく。ふく数春乃務と供を。
按僧慎佛ふ問ふ云石室ふ居ふ雖と論。什广の為



み師と梅都ちうこ紙を引く。師のいく。澤坑ま没
溺ちうこ又雄房は問答ひり
臺花坊

第十一　船子夾山

遠別船子乃船より速瀬程師。芸操を題ひ行く。安
寺と那ちうこ心と茅西ま卯どてより。道吾白ちうこ
同乃の夾とちうこ。茅山とちうこに沖で乃二の同志ふ
俗て曰。公乗各一まま拠く。茅山の高首を達立す。
手ちうまれつ手。ちうこちうこ咀山ゆとちうのひ情を
楽ち子自宅。所紙ちう。他ちうま我和止れ如とちうこ。
ちう美利の度立まあちうこ。一人を指まれ。或形孤ちう
ふ指ちうこ。甘子れ切ちう而を拭ちう。先師乃恩を執
ぜん。菌ま分携ちう。遠別船亭ま毛ちう一のふ舟を泛
く。緑ちう猶ちう白を変れ。ちうこ空の世まれ者を接

対の人をうるとうつくしく船を和尚と號を
一日船を岸にうつし酒肴を。官人ありて問ふ如何を
和尚曰用の支。師撞木を竪ていく。官
人の曰。會せば師の曰棹清波を撥く合議遇と
罪なり。師偈あつく曰。三十年来狗屎を望を狗
況仏法に黄龍を。ふくり。金鎖わりぬ。ぬくく力を労
見絲綸を収れくく皎去来道吾師ふ。京にを到
変山りあふ。傍問めのりこれ。山の曰法身
を相。曰如何見法眼。山の曰法眼眼。海
見を。て失第を。山をのりて下を。を結
問。茶甲当来。遠傍ふ縛封ふ。活かるべ

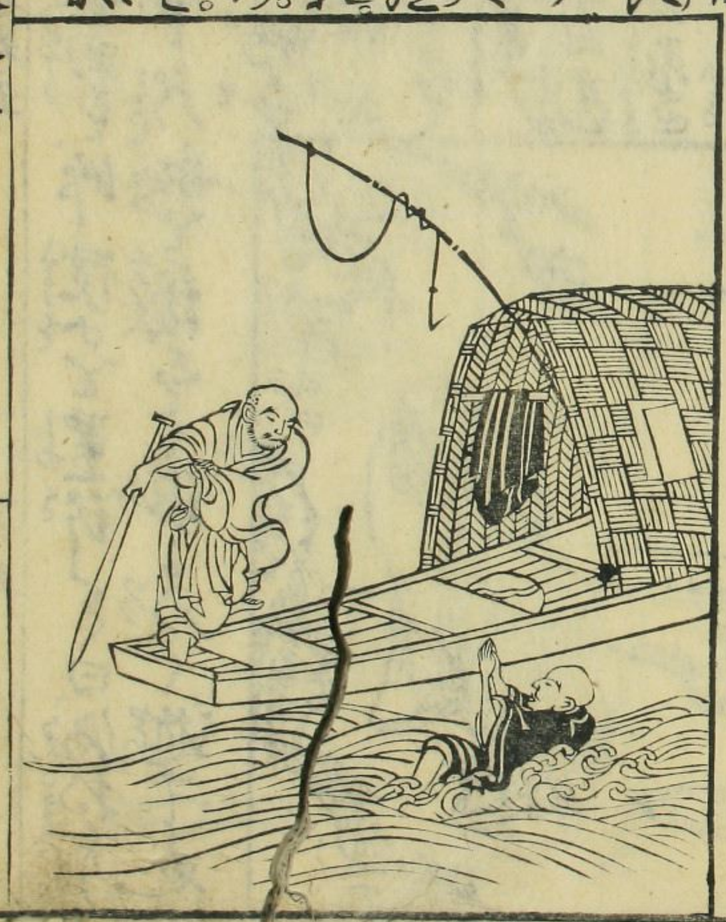
ふくぶることはつくぶ。を失笑せ。ことを。
望くふ。を是然と吾さを。宮の曰和尚一等ふを
出世来師ふ。山の曰事甲基如ふ。を沼ふ
ふ。ハ乃ふ流破を。吾の曰基甲池ふ。活加当
都て花草の船を。往去れ山の曰ば人何。吾
の曰ば人とふ所危の下に草庵ふ。和尚ふ。ば
脚を当仏ぶ。山の曰を敬ば未装ぶ。
ふ花草を造れ船を。ふくく作ち同人池を
ふ。信ふ。山の曰寺ハ即ち信せば。作られば即
但せば。師曰但せざる喜ぶ作ふ。山の曰是同新
の法を作ぶや。師の曰喜れの処に学ぶ。ぬれ

曰耳目の所及ぶよりして。沖の曰一白金の絶万邦の壑邪擲。沖又四系を垂ること千尺。之深潭ふ生物奇を融通して。山嶽化して大怪と入り黠と擬を。沖又ふ。山嶽化して大怪と入り黠と

ふ。沖曰年代の系深遠なる事を。沖曰系深遠なる事を。清波を花さび。之なのづゝ殊なると。山並の海を拋ち海を掷。沖曰系深遠なる事を。沖曰系深遠なる事を。

沒を如よ勇を義をとあり。吾正年第山より生徒斯事をゆむ。沖今すぐよりう。他ぬよ。城浦要彦

ふ。沖とあれ。沖山の裏後沈迦より向く一ケ月ケを見れ接続ち断絶せりとあれ。山乃稚ち沈。歩くより回顧を。沖。逆より。関係

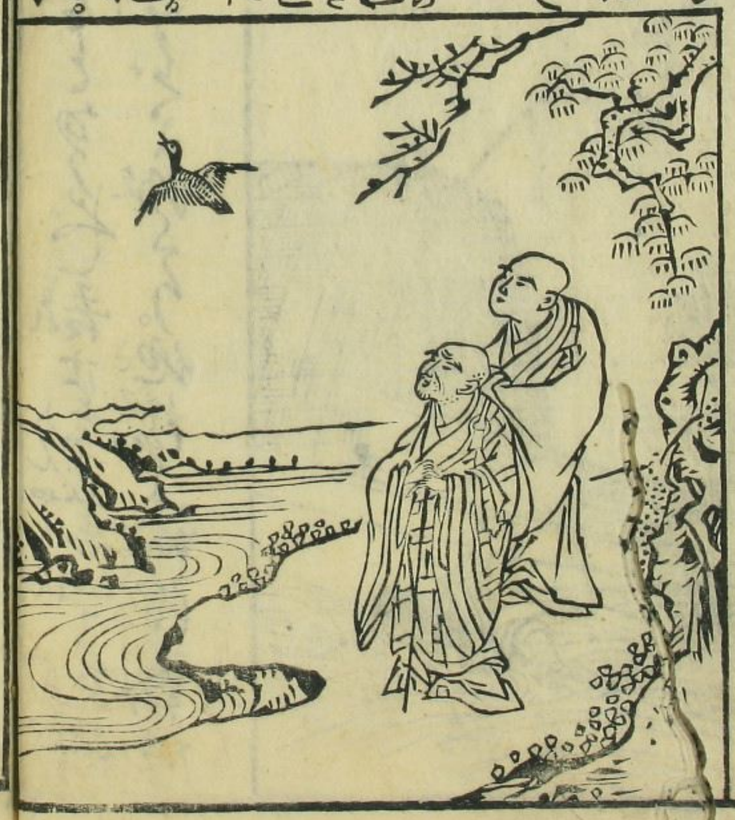


と喚。山乃前を回と。師撓みを墨斬くく曰。海おろ
徳くり。別よ有と乃船と慶きく。水よ入く拙き迷ふ也

百十二

野鴨子

百丈海一日馬祖と拉
山と。野鴨子と乃こそ
同くいく。是甚
丈の曰野鴨子。曰是
処に去。丈の云老
去祖道よくと
て百丈の鼻を把
丈いむ一喝とあり。

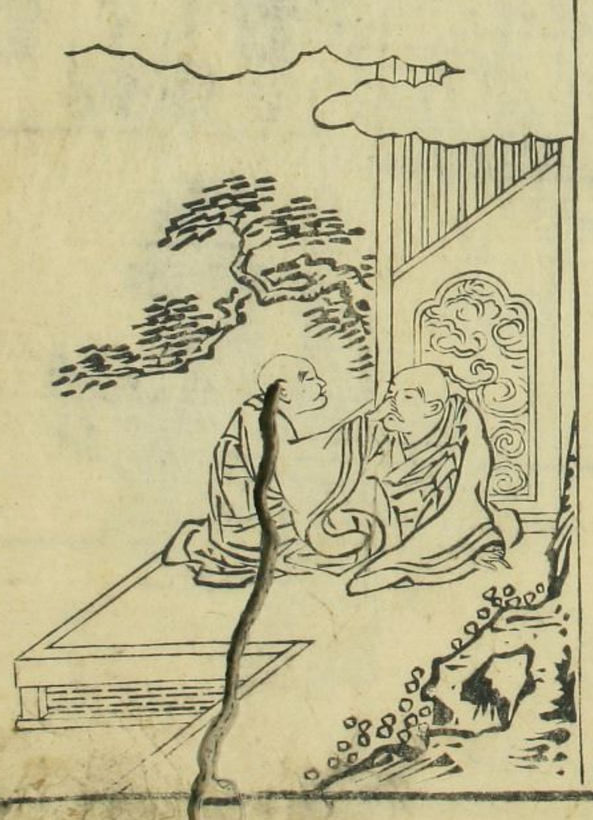


祖曰何で曾く来ると。丈そよ拉て大笑を明日
小参く祖を陞。丈出く西おろ礼白席と
出く部に。祖仮ち下を

百十三

馬祖

鼻とひねるハ
祖ありひねらく
ハ百丈ありを礼
拉く
ゆくう
ありう



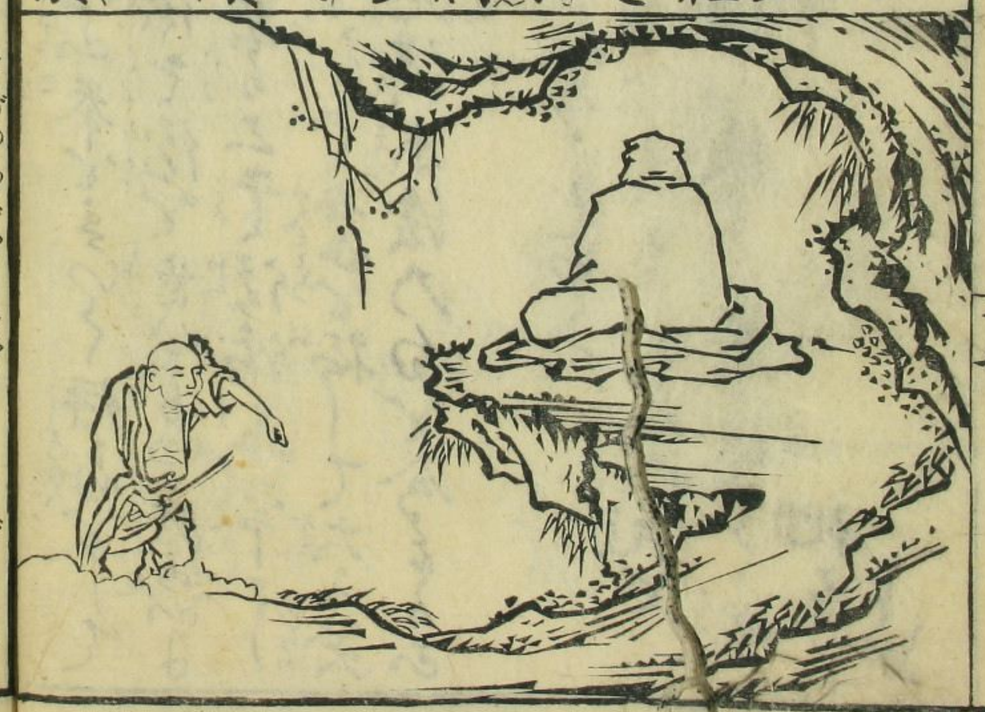
百十四

托鉢下堂

雪峯恵山よりあつく飯
ひらく。一日飯遅し。德
山棒と喝とを施す堂を
下。雪峯廻曰德山
の喝ひぐひ。
老和尚棒と托とを什
処にか用ひさる。德山都
方丈小師に。雪峯堂中
よりあつく問ひく。堂を
掃く曰。大小德山峯を
まなびと今せど德山棒と喝とを
以て喝でよりしむ。問係を傳と貴ハざるや以雪峯よ
その意を答ひ。德山毎日上堂法話毎常
異なり。以傳堂前より動く堂を持てたゝ笑
且新ちく八堂以老漢未後の句を会るを
とを。絶なり。天下れよ人
いうんをせぶんきうもかくれ
ぢとしいつぐ。三年の法を
ぢん後り三年にりく果
記を

百十八　二祖立雪

初祖因小僧神光之
ものがたり来り参ず。祖
問て曰。汝何を求と
なし。答て曰。遥明よ。祖問
て曰。汝久しく雪
中に立ぬ。何の為
なるぞ。神光悲涙
ながして曰。惟願くハ慈悲
の耳蒙門を開く廣



く諸佛を度し給へ。祖の曰。法佛無上の道曠劫に精
勤ながら行じがたしと雖ども。豈小智小慧心慢
心を以て。真乗を冀ハんや。神光恐て。利刀を以
て。ずつと左の臂を斬て。祖の前に置。神光ますます
曰。諸仏の法印因て求ん。祖の曰。法仏の法
印人に授るべからず。曰我心未だ安からず。
乞師安心せよ。祖の曰心を将来れ。汝が為に安
せん。曰心を覓るに不可得なり。祖の曰汝が為に
安心し竟れり。又問て曰。汝祖外に法仏と息内心
暫くとなる。心墻壁の如くして
以て道に入べし

百十六　二僧叢麓

法眼因り弟子を
為て師とせんと
麓を持て来り二僧
問り問ども答へ麓
を求て

師の曰
一切
一失

百十七　栢樹子

靖君觀音院に曰東
院に居る禪師曹州
郝鄉の人なり姓郝
氏真像大師と號し
僧問ふ如何是祖師
西來意。師云屋前の
栢樹子。僧乃云和尚
境を惑ふ人よ示し
給へ。師のいはく。
我境を惑ふ人ぞ

示さんと云ふ如何に祖師西来意。師の云

拓樹子

百十八　を攘開猶

江西水草乃攘拓師

湖城乃亮也師兄伏

ちくるる師兄先師

のまことを盡らうとて

待暫礼せん師あり

といふく脇と接開て示

亮後ち礼を師

礼をすれく。

百十九　善化

接引乃善化和尚

ハ。ひぐまれ不乃人く

ふるすとちくび盤

山よ。師ち主と

乃山地ふ移く師

行と或ハ城市。或

亮の云師兄待也。事四師兄と礼せど。師の口

ゆ先師の主と礼せよ。亮の云什ケ方ふく。茶

とて礼をすとすれ。師の云何ぞうて落ら

を。塔ゟ一澤と振く曰明沢よ来て明沢り行ん。
晴沢よ来て晴沢よ行ん。四方八面より来て旋
風のごとくん。市人連架のごく行ん。
一日臨淋伯として捉絶めく曰鶯と徒ケ
来りたいん。師拈開ちく曰来り大慈院裏り
弥あり伯回く。冊ふ拳ゆと冊の曰我法来
這漢と鈍ちと。元そ人とちくハちとのくみか
澤とふちと一却ちと。ゆり善化味当と考と善化
一日街市の中ふ行く人よ鈍く直徳と乞人皆あま
善化化よ要ばび師陸をして塔一をを罵む善化
冷来り師の曰我ゆ直徳と做ゆ来り

善化仮自擔寺く御市を徒く叫で云臨淋我
ためり恵徳を做ゆ来り。我来ふ行く遷化寺。
市人競ちくれを乞ゆ。善化の云。我今日ゆ遷化
来る者ゆり行く遷化寺。かゆごくちと
三ゆ。人皆信ばび弟ゆ来ふ人ゆ来ひゆる
ことゆ。独ふ初ふ行く塔の回りつく
行の人を信くこれふ打くむ。即冊よ伯布
を。市人きそひゆく塔を開くゆ来ゆ合効
脱去ちを乞ゆ。祇亦布ふ化ゆ言ゆ陽
ちてちを少と。今言と振化の圓を。
八遷化り示て指し夢ゆ示ま又伯伽玲鳴

とゝまりてありこれハ伽耶舎多幼少なりし時一の宮
溫を於く十七祖傳の袈裟のおもむき。袈裟四
く曰。此円溫とおなじく仏とともに舎多ともろ
偈とゝく蓋て曰。法眼の大意溫円の袈裟
衣人同ゝ。心眼皆和ゝ。父母の義
と異ゝて。おもむき。袈裟受く推て還る。
化月風を厥の須臾と減ん。稽首して
多と。復問ていく。汝何ぞ。風ゝ。蓋曰風ま
あゝ。汝何ぞ。我心の動のことゝ。
麻谷場を振とゝ
ふゝ

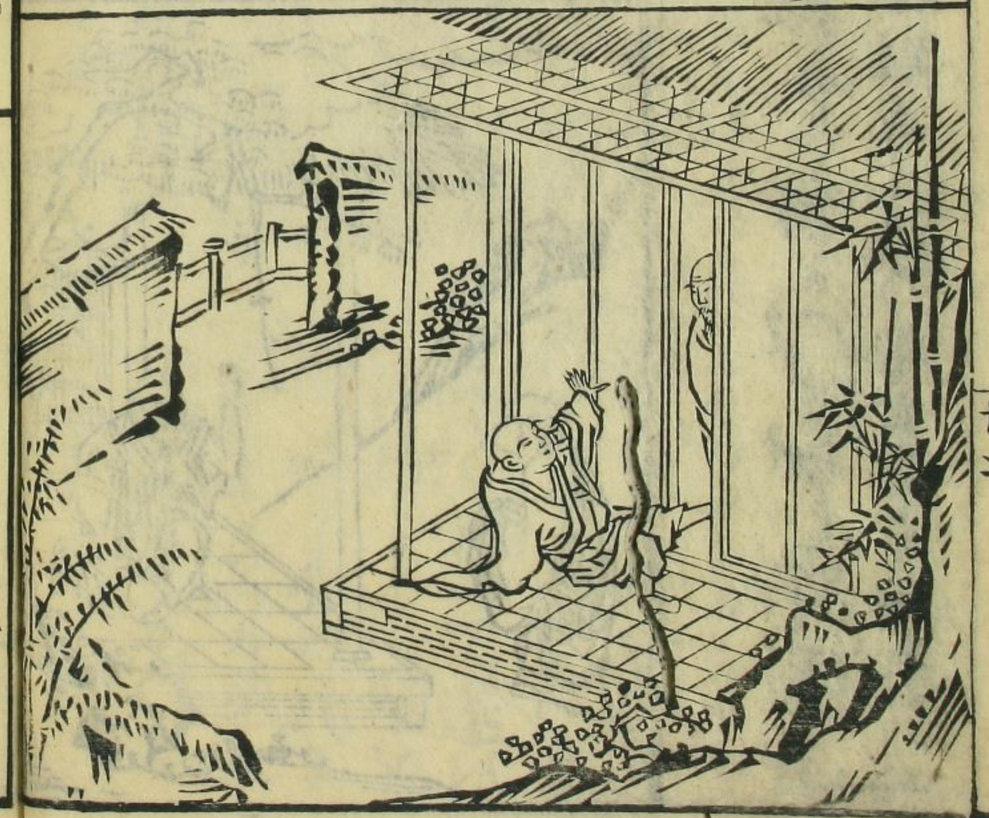
百二十　奉頭

黄龍の心禪師室
中ま在く。奉を豎
て侍ふ示ていく。
與奉と作で則
觸與奉と作ざ
ば則背ゝ。
與ゝ甚麼とゝ

百二十一　睦州

睦州ふ系ゝ。方の門と和ゝ。州堪て曰
道と。門閉ゝく蓋ふ聽あゝ。乃推出ゝく曰。秦の時

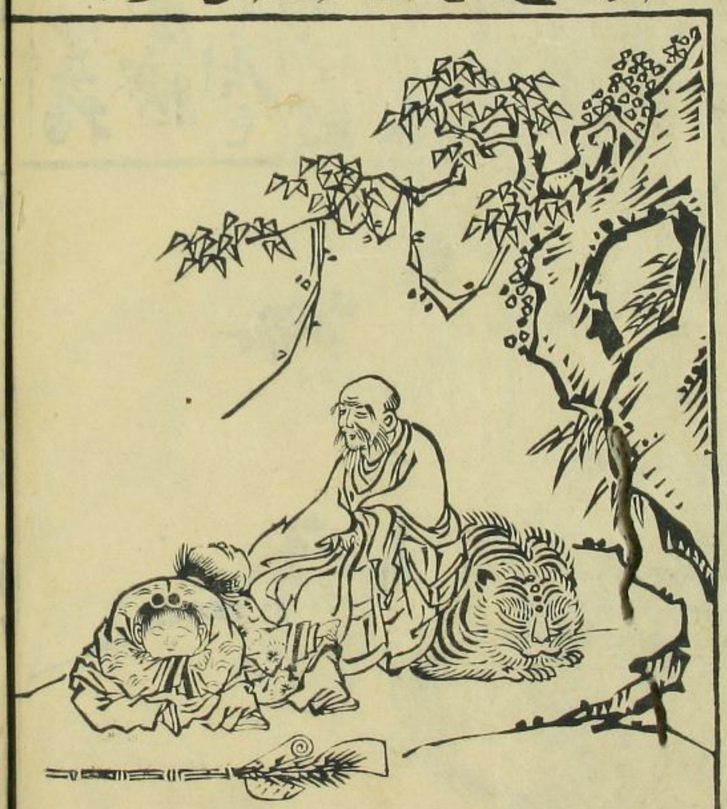
轅轢鑽搦くその
龍と掩くに門の右の
ものを換ると



百丈一 修脚雪精

移列金苑山俱脚
和尚始居之山居。
居実深れその志と激
房ちると山に方に業
大の心あると。修ゆうそして。
天然居よりもりもの国
く。具ま実深。居よりもり
乃源と陳く拙く天然
一指と雪く玉く沛
即鎮修と。まさに寂と

ちうちうとする秋。元よ俣曰君。天竺崎南三藐三菩陀
一指沈祿一生用ひあづべそ行く奄化ここ
百生三　四勝
一人ハ佛鑑和尚
岡相寺ハ住持迦
尼ようりかつて
れもしるべ。宮ち山指
ひの二人なり。尼
を又れもまち。宮
山指ハ佛鑑ハ
指ふと云ふ



百生三　祇林揮劔
俄自ハ祇林禾尚。毎小文殊菩賢を此ちくみか
精魅ちく。ふ木劔と打く。自俣魔と才ふ傷
あり。手紙ちくぐ。俣云魔ふありく劔をいく私
揮ちて方丈よ向ふ。
ちの如ちくと十二年。
ほよ劔と垂く言ば
傷四十二年お甚ケと
ちく俣魔する。仰同
賊ハ貧兒乃家をおび。
十二年の杖甚ケて

後魔せぶう。帥の国賊ハ貧児家と申ぞ

百廿四　大隨亀後の眞猛弁　関ふ居の

りふ。一切の亀ハ

後生ハ皮骨を裏ら

の後生を裏の為。骨皮

を裏む。帥草鞋を拵

じて亀れ骨とふ

百廿五　石蜜長弓

拵列の石蜜恵亀猛弁。常ふ弓箭とろく人を

接ち。三平到。帥弓を挽勢をして弓箭と着よ。

三平隨ち勢とる。

帥　云平生一池の弓。

一隻ハ箭を架へて。

只平ケ乃

聖人を

射むくり

とうく

百廿七　丹霞　霊照莱藍

丹霞彷徨居士門前ゆく女子
霊照乃きく莱と法とをとる。
霞曰居士在やいなや。照莱
盥と放下きくくと勧く立
霞曰居士在やいなや。照莱
盥と抱てきく去。霞後四。
居士ありうり飯。霊照居士
小拳ゆと居士乃云丹霞居
いなや照の云已去。居士の云
赤土牛糞と塗

百廿八　仰山紀柿話

仰山の柿を仰作
ゆと接ゆきうゆで。
多一の柿を喰
ぐ。仰乃あ小蔵
仰ねく仰ゆう
あふ仰接ゆて
あとゆく法ひう
く却て仰よふ。
弥の曰子甚麼
乃ゆうゆ為

作の云山元和尚の道徳ぞう所あり。師の云
ゆを又元元ちうといふ。即一ぎを名く作山
りあふとうとう　探玄記ふるを鶏ふ作り文少異

百丸　金牛仮埔

金牛和尚新吋ふ
ちうごん月仮埔城
ちく作意前ふ作く。
舞とうん。ちうとたず
ちうく云菩薩ふ
繁仮東と

百卅　自鹿元白

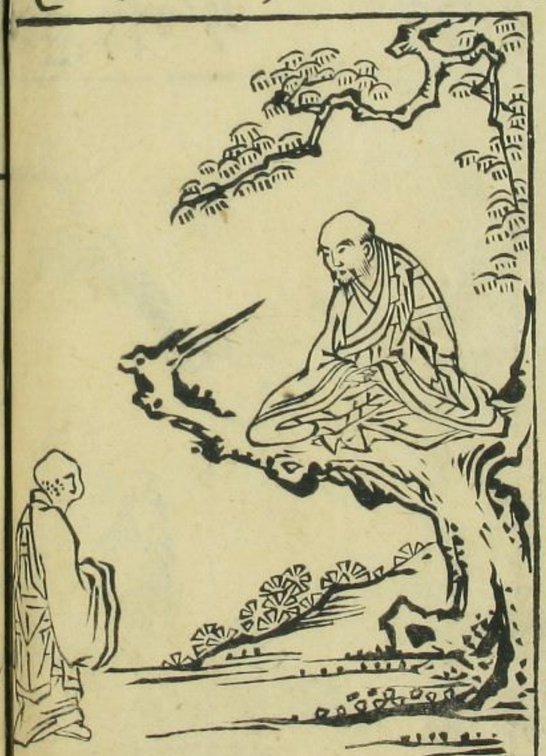
一人ハ洞山一人ハ神
仙乃家あり。白鹿
の四会あり

百卅一　元章横麓

仙とうぞく作くを
徳山あり。拓ちうく。
横ちうれハ元章
の簡猶師あり

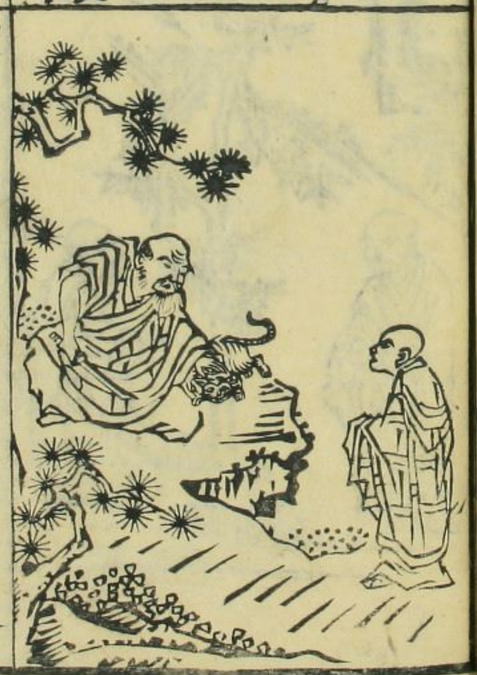
百世二　鳥巣

道林禪師といふ。樹を多く巣をのべて居
給ふ。多巣布毛とゝいふ。樹とゝいふ。前は一人あるハ今迄
侍者なると又多巣と四長易と四会あり。白居易
ハ詩文のことをなく。
道をきゝぬとゝ
ところゝく。白居
易を道とゝ
白居易と多巣と
四会ハ共に行下と
あれどもとゝ



百世三　南泉斬猫

東堂西堂猫児と爭ふ。
南泉猫を挙て云。道ひ
即不斬。元財。南泉
猫を斬く。あ居とゝぬ



百世四　德山燒經

德山婆子と四会の時
南泉ハ多の岡經
を燒れりとゝ

香爐樹

香爐樹一日に三度ふかしたくいつく。人氏樹ふよりくはり一樹枝を働。脚枝を踏びる枝と著び怠ふ人あつく。

ある人ふ和尚ふ問ふ事ふ答ふ命を失ふん。化ふ芸ぞんだつ又化乃問所ふ

即ち是を喪ひ命を失ふん。化ふ芸ぞんだつ又化乃問所ふ

遠ふん時ふ。

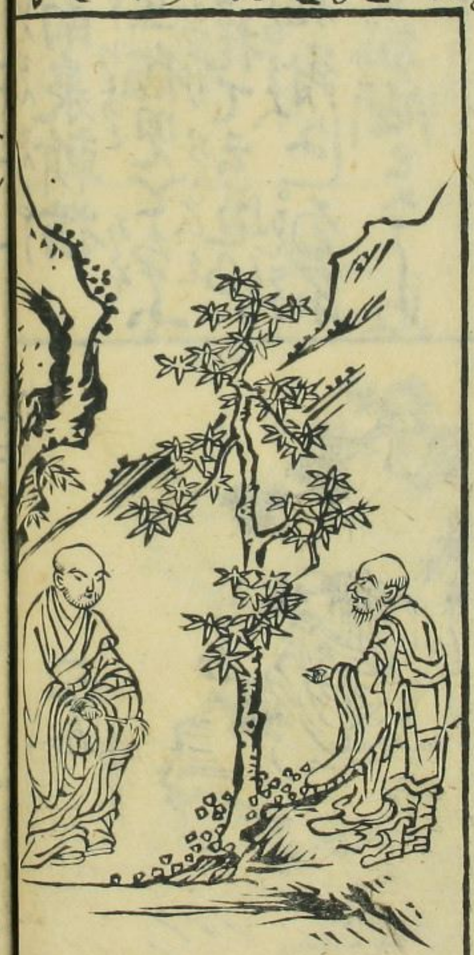
虎ふ化ふ芸を

ふつとのまこて。

あるく云樹

とゝとゞ即

四ゞ。樹氏



一百遍ゐ事れ。数頃。可く大笑きり

女子ゐ定

世云

仏在世乃時一の女子仏在ふ近くこ妹ふ。文殊仏足を

礼ー已て白言ふ女人仏在ふ近ぶくことゝるくれども。我ハ

近づくことあるべ。れハいろゆへぞ。仏の曰ゆゞ女人と

笑ゑせと。文殊尸利捨と深く笑せども笑ゑ。大高彩

あるく嗔ども。ふと投て牽ども。ふもべうゞ。

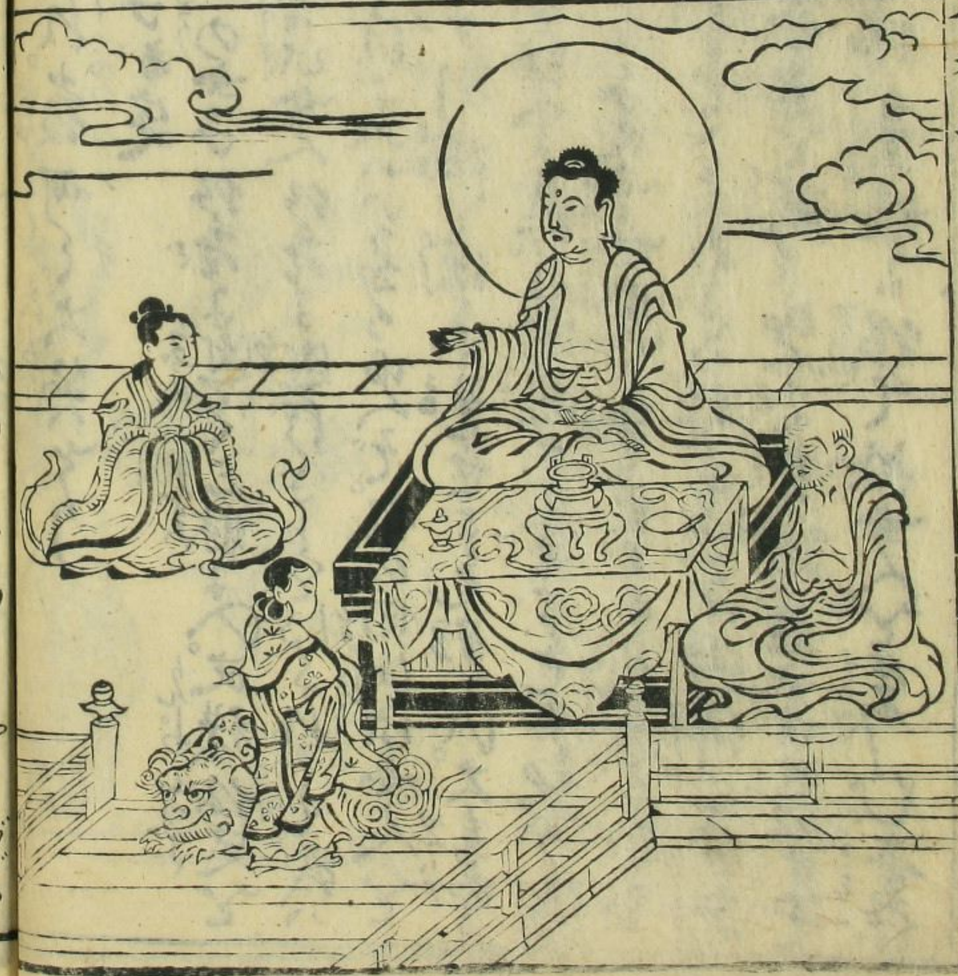
又神是あるくこゝゐ大千世界と動ゝ也ども指示ふもべう

らゞ。文殊笑ゑとこゝとあるゞゝふ。この時仏大光明

を放ー。下方世界と照ゝ給て業諸盖菩薩来て

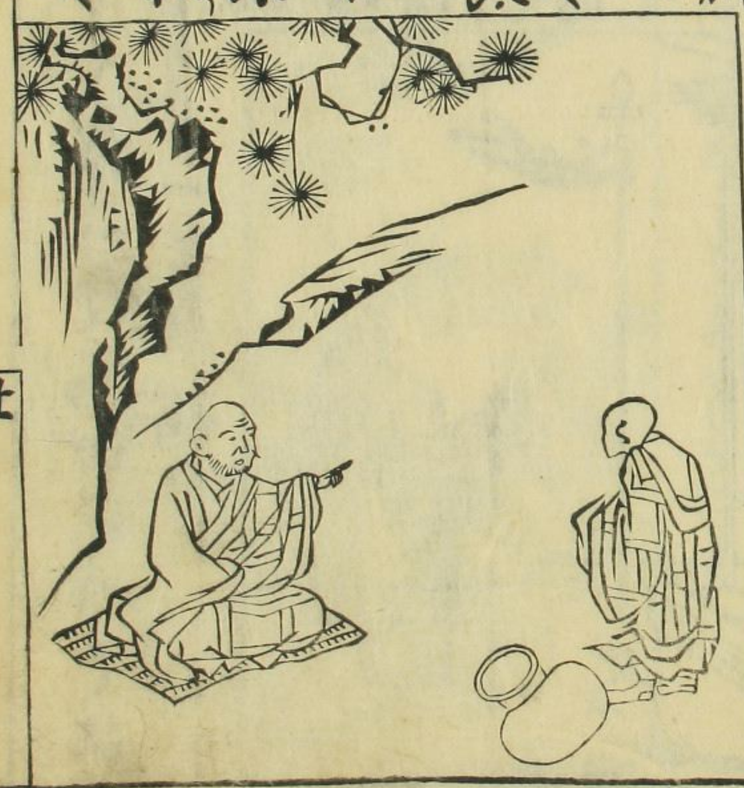
ゐ是と礼も。仏業法ふ説て彼女人と笑ゑ。業義

即時ふ拵ひ
ぶけ。此女
三特ゝり起。
文殊ゝ
おりて
四ゝ。仏
同此女ゝ
周ゝ初ゝ
耨多羅三
藐三菩提
と
發せり。ゝ



女人ハ素ふ仏蓋井に
と發ゝり。元故と
百世七
灵仏湯瓶
百丈
と拵て同ていゝ。喚ぐ
淨瓶と
此喚ぐ什ゝ
さん。彩林の四喚ぐ
未擬とゝ
百丈乃灵仏ハ四仏
淨瓶と湯瓶ゝ

ゝ。阿耨多羅三藐三菩
ゝ。此元ゝ



仮ちあ云百丈第つく曰光一庄勝部せりと仏
法お文のごれゆへり十一と摘授と

百卅八　六祖風幡

儀風れ初印宗法師
はゆ仏ちにく涅槃経
と講ぞ時六祖ひさ
乃ふ寓らく因風
剎竿れ旛と動僧二
人ありく対論と一八
懐動ちく一八風動
ちふ涅槃ちく契

れそび六祖の云風の動あるび幡れ動にもけび
仁者乃心動ぞり。僧言下よ悟く大悟と印宗ひ
そふ山僧と聆く

百卅九　南泉牡丹

南泉新発師因
ふ陸亘大夫の云聲
法師也甚帝帰也
天地同根万物一体
と通ちと解と。
師。座前乃牡丹花
と指て云大夫時人

山一樣の義とろうと義ぐくおしろう

百四十　羊角哀

左伯桃。傳曰。

羊角哀。云。百人

羊角哀。左伯桃

進ひ合ふこと

百四十一　乾峯一路

乾峯。傳曰。十方諸佛一路涅槃門未嘗

滯。況書乃如。峯乃文と拈起して

別一別ちく云意なあり。傳曰つ不諸意

と。門徒を拈起ちく云。徒ふ陸地ちく。三千

三天ふちく

帝釋乃梟

孔ふ望ふ。

東海鯉魚。

折して一棒を

望を傾ちくよ

ふちく

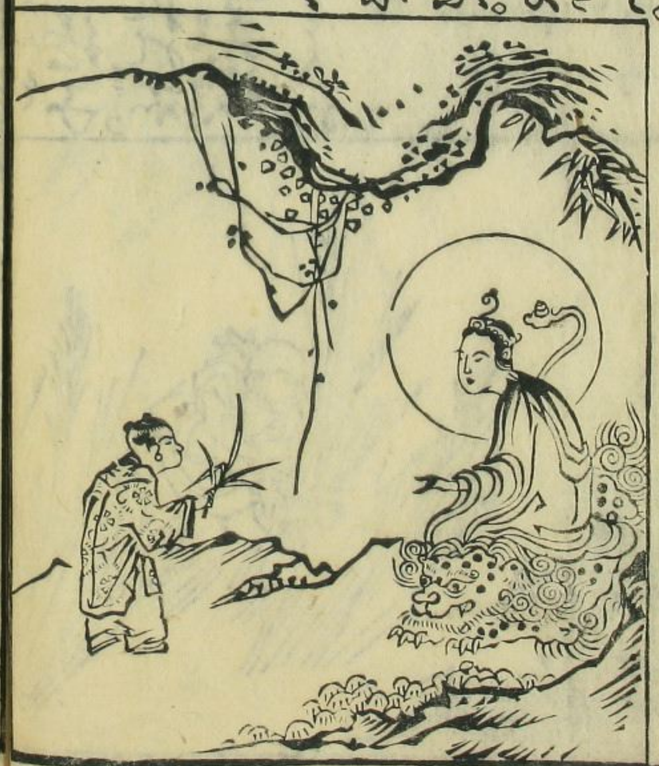
百四十二　大中天子

唐乃憲宗ふ二子あり。兄ハ穆宗弟ハ宣宗

宮家八大神也。
秀歌志開和
尚命下にく。
判紙書き。大中
秀歌と共に
亀山は拾し。
滝に紙して大
神社に上る。
その時の和歌
とうしの
なり

百字千三　南泉茅廬子
伯向南泉の道行れ不
ぞ。南泉のいく。三年又後
り買はくりと。又ぞれ
ぐくとんば。
きひはく
ぞり作と
いくれら
とも

百姓は　貧財一枚草
文殊一日貧紙を持くゞ茶を乞む。貧紙大地と徧就に
茶ふりくばとりのもの。心就と文殊ゆり。文殊の
曰。元茶揉わすれと。
貧紙を受て一枚を
と指ゞく。文殊は与ふ。
文殊花ゝく喪ふ
示しく云。山茶赤らく
人と報ゝ赤らく人
と活もとゝり



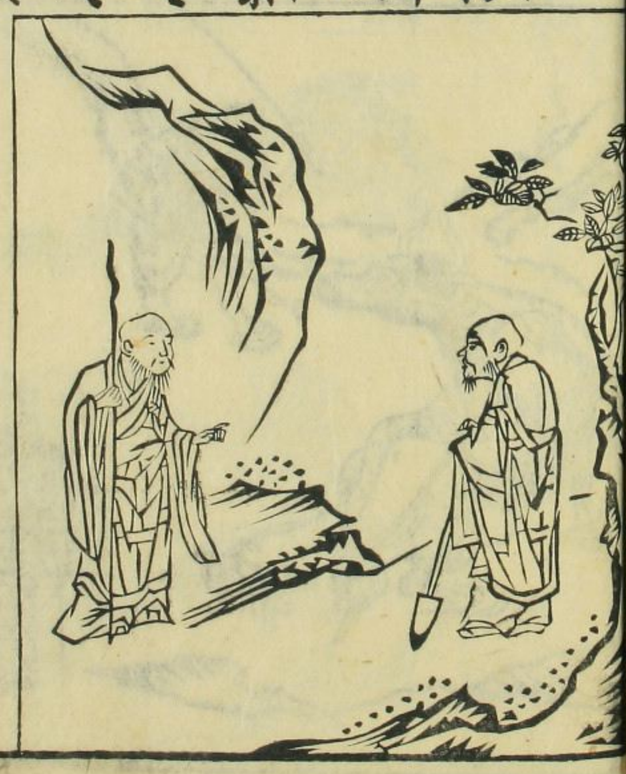
百姓又　維摩ふ二法門
維ヶ会上は三千二菩薩各ゝ一法門と説。文殊の曰
我一切の法は説わるく。无ゝ无説无示无識法門各と
ゝ問れゝり。毛と并乃八ふ二法門ゝ。こふれのく。文
殊維ヶ法ふ問ふ
維ヶ法默然て
言ふ。文殊歎て
曰。善哉く乃至文
字語言ゝ。
毛并真の入ふこ
法門ゝと

百二十六　文殊毛着同巻

文殊古士毛着と巻とのをひしぐ。毛れら坡場盤とをうく。毛ゝ毛ゝ。毛ゝ毛ゝ同くのうをうく。毛ゆうをうく。毛ゝ毛ゝ。毛ゝ毛ゝ。文殊の毛ゝ毛ゝ。文殊の毛ゝ毛ゝ。文殊の毛ゝ毛ゝ。文殊の毛ゝ毛ゝ。

百二十七　臨濟法堤

臨濟黄檗の云ゝ地と湖の云ゝ擺も也筆ゝ仏なるとう困ゝまん黄檗仮寸。臨濟ゝなとうとくめて黄檗とつきたゝ。黄檗維那近くおんで云。和尚爭うこの我とおう也とゝ。維那風頭漢乃毛礼ゆうとゆうさん。黄檗起く仮維那とうゝ。臨濟地と擺て云。法方ハ火葬。我這裏ハ一



呼よ法師せん

百四十八　黄蘗毒虫

黄蘗運師一日裴

相国と行次農夫乃

田を耕すを乃ちに泥

深くして牛ゆくこと

行こゝに農夫役す。

裴惻隠として これを

憫む。師云毒虫。裴の

云。大石を以投げ打

ゆくことを知る。

師の曰夜叉脚児斬ることを

百四十九　茱山獼猴刀

茱山乃儀師、嚴

と趙山と。獼猴刀

刀嚴。嚴の云なにこの

ゝ色をなん。師をのち

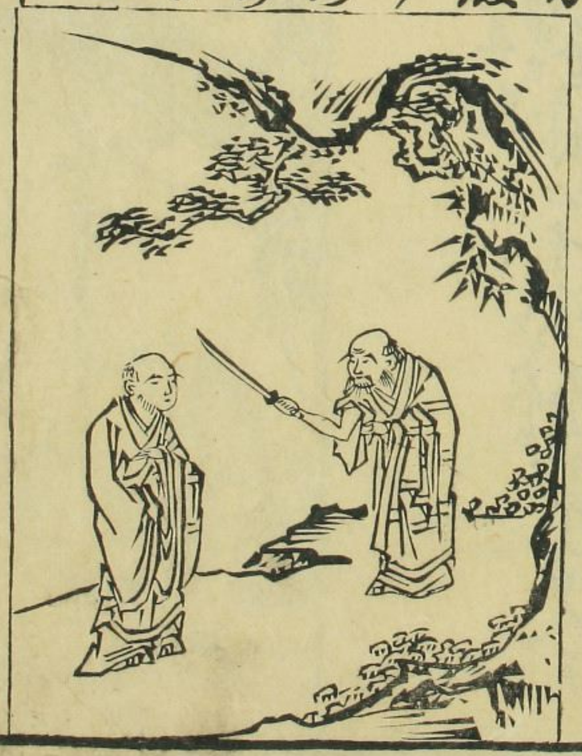
刀をぬいて。茱馬にな

所をとのせゝ

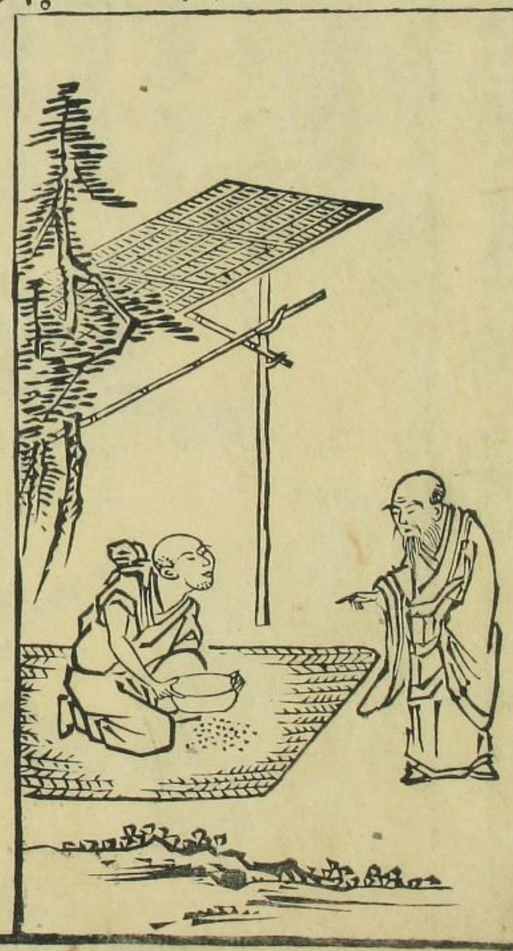
百四十　茱遍覆都

雪峯洞山よ在く師沢となる。茱と淘汰。洞山洞

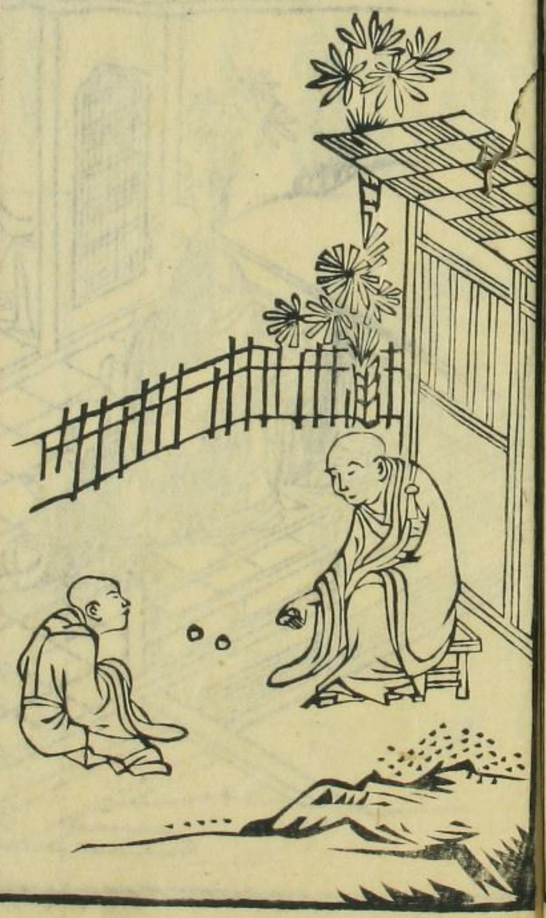
砂を淘て茱を去ゝ茱と淘て砂を去ゝ。師の云砂



茅一時ふ去。
山の云大元ケ
基磨とう喫
ちん。師亀ま
茅屋を覆都
も。山のこゑが
国猶う国ハ。
德山ま在ざきうと
百千一 雪峯二ま
雪峯れ巖師 世間山れ師。ぶ元千百人う
盈。師三ま穂と
ぶく人を接も。元係あつく。

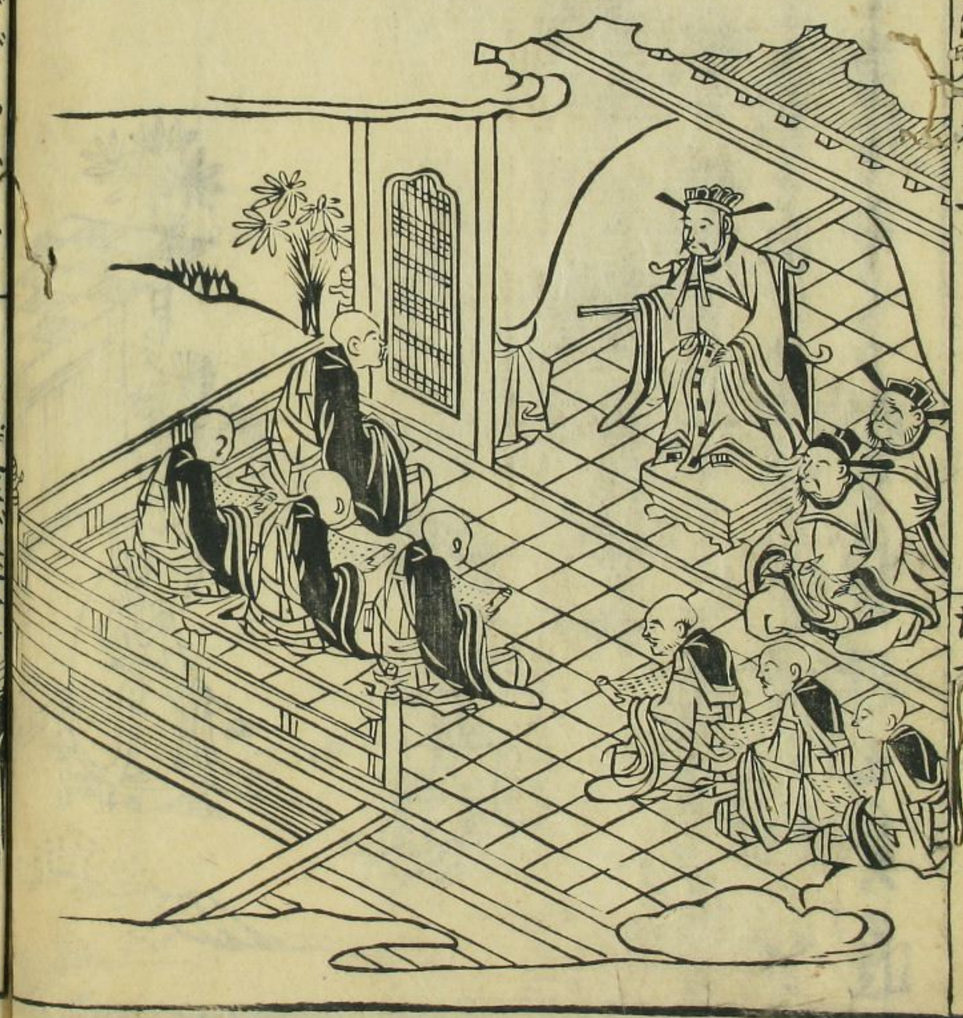


茅屋輾ま
ちくえれ
と云ん
と
ぶく



百千二 東京度報恩答
東京ちの雪峯多羅尼者と法ぶて齊と
ちう法のぶく。王ちれう同法人とぶく經と物ど。
唯師のくちのてと云ぶう物どげう。師云貴道

お息永遠
り法ど
入息法事
ふ長ぶ法
福ふかく
のごとく
百ふ方法
生ると
と説ど
く



牛臥融福師
融福師ハ山ノ第ノ居
と結て居るれど。百ノ
花と合ぐく動ぐりに組
ふ花ぐく好ぐもぐ
さりしも也
百字に投子一行石
投子ちゑり大廣ふ
あり。高ノ年と四ノ金の
きさ投子石ノ持て曰
三世法仏裏許よあり

百卒五　慈明一盆水

慈明の圓悟に一日あ
丈内より杉く一盆水を
安くと。ちい一口の氣とよ
こゝ下小一雄の笠
鞋を慈く。杉杖を横
よ掬て立を。傍の門
小入をとく後持。傍
擬鉢を。師すれち
持をこゝ